

茶の湯にみる調和の精神

安田 保

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study of "The Way of Tea" —The Spirit of Harmony

YASUDA Tamotsu

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The unique culture of "Chanoyu" (The Way of Tea) was established during the late 15th and early 16th centuries. Tea masters of "Chanoyu" believed that a peaceful world would be created by its spirit. Unfortunately many struggles and wars exist in the present world. Now we must reconfirm what the masters wanted to infuse in us through the spirit of "Chanoyu". We must also consider making good use of this spirit for the road to peace.

序論

「茶の湯とは何か」、この問いに千利休 (1522-1591)¹は「渴きを医するに止まる」と答えた。

² 利休が茶の湯を大成させ 400 年以上が経過したが、何度も繰り返されるこの質問に対しこれ以上の答えはないであろう。

茶の湯は精神的、物質的面より日本文化に大きな影響を与え、我々はその恩恵にあずかってきた。しかし、我々がその精神、真意を継承しているかは疑問である。

「今後茶の湯は盛んになるだろうが、かえって本当の志は失われていくだろう。百年の後でも、自分の志を伝えてくれる人が現れ、一服の茶をたむけてくれれば、骸骨も亡魂も喜ぶだろう。その時はその人の茶道の守り神となる。」と利休の憂いた通り³、彼が目指した精神世界とはかけ離れた世界が創造されている。

利休の言葉“渴きを医する”とはただ喉の渴きを癒すことを意味しているのではない。その真意をわび茶を創造した茶人達の言葉によって実証するのがこの論文の目的である。

岡倉天心(1862-1913)⁴は『茶の本』⁵で、茶の湯を美の宗教ととらえ、人生に美と調和と和楽とを授ける秘法と定義した。「東西両大陸が互いに警句を投げあうのをやめ、両方に得るところがあれば、そのことによってたとえ賢くならなくとも、もっと悲しみの心をもとうではないか。西洋と東洋は異なった方向に発展してきたが、互いに長短補って悪い理由はない。あなた方は心の安らぎを失うという代償を払って膨張を得たが、われわれは、攻撃に対してはもろい調和を創造した。あなた方は本当にするだろうか、東洋はある点において西洋よりすぐれていることを」⁶と日本の文化、茶の湯が平和な世界を創造する鍵を握っていることを暗示した。しかし、『茶の本』が発行されてから、約 100 年が経とうとしている現在、未だに世界中で戦火が絶えず、国内においても殺伐とした事件が後を絶たない。

茶の湯とはただ湯を沸し茶を点てて飲むばかりなる本(もと)を知るべし⁷

利休作と言われるこの和歌にわび茶の原点を見ることが出来る。当たり前のことを詠んでいるが、和歌にあるように茶の湯の本(もと)を知る必要がある。先人の教えを再確認し、本(もと)の意味すると

ころを考え、茶の湯の調和の精神を如何にして現在、未来へ役立て行くかを考察する。

I 茶の湯の歴史

喫茶の習慣の誕生からわび茶が成立するまでの過程を検証する。

(1) 喫茶の起源—中国

茶（学名：カメリア・シネンシス）⁸は、陸羽（？—804）⁹の著した『茶経』の冒頭「茶は南方の嘉木なり、」にあるようにその原産地は中国南方の地帯、四川、雲南の国境方面と考えられている。¹⁰ 飲茶の風習は漢代には知られ、唐代に広く普及するようになった。茶に関する最古の古典『茶経』は、三巻に分かれ、(1)茶の源、(2)茶をつくる道具、(3)茶の造りかた、(4)茶器について、(5)茶のたてかた、(6)茶の飲み方、(7)茶の記事、(8)茶の産地、(9)略式の茶道、(10)茶の図の十門について詳論が加えられている。¹¹

『茶経』にある喫茶法は、団茶法と呼ばれるもので、まず茶葉を甌で蒸し、杵と臼で搗き、細かくなったものを型に入れ乾燥させる。こうしてできた団茶（固形茶）を飲む直前に碾（やげん）にかけて粉末にする。次に鉄製釜に水を入れ、風炉によって水を煮、釜が静かに鳴りはじめたら塩を加え、湯玉が煮え上ったら柄杓で一杯汲みとった後、湯の中心をかき回して茶の粉末を投じ、湯の沸騰したところで、汲みとった柄杓の冷めた湯を注いで煮えを鎮める。最後に釜の中の湯を表面に浮かぶ華と沫とともに茶碗に汲んで飲む。¹² 唐時代にはこの喫茶法が主流であったと思われるが、宋時代には石臼で粉末にした茶を茶筥で攪拌する点茶法が成立する。

(2) 喫茶の渡来—鎌倉時代

日本における喫茶の記録として最も古いものは、『日本後期』の弘仁六年（815）四月廿二条にある大僧都永中（743-816）が近江国へ行幸した嵯峨天皇

（768-842）に茶を煎じ奉ったという記述である。¹³ 永中が唐で学んだ喫茶法は団茶を用いたものと思われるが、宮廷人の唐風文化志向が薄れていった為か、この喫茶法が定着することはなかった。

点茶法を日本にもたらしたのは鎌倉時代の禅僧栄西（1141-1215）であることが通説となっている。¹⁴ 栄西は二日酔いに苦しむ将軍・源実朝（1192-1219）に喫茶を薦め、その著書『喫茶養生記』を献じ、その医薬的効用を説いたとされる。¹⁵ 『喫茶養生記』は、上下2巻からなり、「茶は養生の仙薬、延齡の妙術なり」の書き出しで始まり、茶の人体に対する薬用的効能が記され、ついで茶の採取や製造についても述べられている。茶には睡気を覚ます効能があるため禅宗寺院で広く用いられるようになった。

また禅宗だけが喫茶文化を受容していたのではなく、南都の律宗の僧侶も、民衆への布教に茶を用いた。

叡尊（1201-1290）は、関東下向に当たり、近江・美濃・尾張・駿河・相模で茶事を催し、病人を救済し、慈善に努めたと『関東往還記』にある。¹⁶ また師叡尊の意を継ぎ、常施院・悲田院を建て、貧民、病人を救済した忍性（1217-1303）の遺品である千服茶磨臼は、茶との深い関わりを証明している。¹⁷

(3) 闘茶・庶民の茶—南北朝時代 / 室町時代

薬用的効能が注目された茶は、武家、公家へも浸透していく。茶の産地が増加すると、茶葉の品質も多様化し、茶葉の生産量が増えると、新しい茶の利用法が考え出された。それが闘茶（茶寄合）である。闘茶は、栄西より贈られた茶種を高山寺の明恵（1173-1232）¹⁸が蒔いたことに始まる梅尾（とがのお）の茶を「本茶」、それ以外の産地の茶を「非茶」と呼び、当たり外れを競う遊興であった。『太平記』にも、茶寄合と称し多数の人々が相会して囲碁、双六、連歌などの遊びとともに、茶を飲み合って、その本非とか良否、水質などを競う闘茶、すなわち十服茶、三十服茶、七十服茶、百服茶を飲んで打ち興じて遊んだと著されている。¹⁹

また、茶葉の生産量増加は一般大衆も喫茶を享受する環境を生み出し、寺社の門前には参拝者に茶を

飲ませる一服一銭と称する茶屋が出現するようになった。²⁰ 地方への喫茶文化の浸透は、応仁・文明の乱後加速されていったと思われる。

(4) 書院式喫茶－東山時代

筑前国崇福寺の開山南浦紹明(1235-1308)²¹が文永四年(1267)宋より帰国した際、台子と七部の茶典を将来し、台子は後に京都大徳寺に移され、やがて夢窓国師(1275-1351)²²により初めて台子飾に用いられたと言われる。²³ 足利八代将軍義政(1436-1490)²⁴の東山山荘時代には、新しい建築様式「書院造」の形成に伴い、唐物の絵画や茶の湯・聞香などに用いる器物を飾りつける「座敷飾」が形成された。正しくは、義政の父六代将軍義教(1393-1441)²⁵の時代には「座敷飾」は存在していたという記述が『室町殿行幸御飾記』にあり²⁶、台子を用いた茶の湯もこの時代に成立したと思われる。将軍家の茶道具、美術品の鑑識、管理には同朋衆と呼ばれる法体の人々が従事し、中国渡来の唐物が重宝された。村田珠光(1423-1502)²⁷は、同朋衆の能阿弥(1397-1471)²⁸から茶道具の目利きを学んだとも言われる。²⁹

(5) わび茶の成立－桃山時代

『山上宗二記』³⁰に「茶の湯をしないものは非人にひとしい」とあるように喫茶の習慣は庶民の生活に入り込むようになる。『正徹物語』³¹では、書院の茶を「茶数寄」、闘茶を「茶飲み」、庶民の茶を「茶くらい」の三つに分類している。これらと禅寺院での茶礼を合わせ、一本化したものが村田珠光の作った茶の湯である。

珠光の門弟に学んだ武野紹鷗(1502-1555)³²は、わび茶にふさわしい道具を残し、茶の湯をより深く精神的なものに高めた。紹鷗の弟子、利休(1522-1591)は茶の湯を体系化し、総合芸術へと大成させた。

II わび茶の系譜

中国より渡来した喫茶の習慣は、禅的思想と創意工夫が加えられ、「わび茶」が大成される。わびの世界を創りだした村田珠光、武野紹鷗、千利休それぞれの美意識、精神性について考察してみる。

(1) 村田珠光－茶の湯の祖

経歴については確かなことはほとんど分らないが、奈良に生まれ、京都で商人となり、茶の湯を好み、茶道具の鑑定に眼識を発揮し、町人茶人の草分けとなったことは確かである。³³ 珠光は、大徳寺の休一宗純(1394-1481)³⁴に参禅し、茶の湯に禅的要素を織り込み、「清浄礼和」を本旨として、それまでの武家、庶民の喫茶を一つの道に統一したことから、茶の湯の祖と呼ばれる。珠光の茶論は、弟子古市播磨(1459-1508)³⁵に当てた書状『古市播磨宛一紙』、いわゆる『心の文』に表されている。

「此道、第一わろき事ハ、心のかまんかしやう
 (我慢我執)也。こう(巧)者をはそねミ、
 初心の者をハ見くたす事、一段無勿躰事共也。
 こうしや(巧者)にハちかつき(近付)て一言
 もなけ(嘆)き、又、初心の物をはいかにもそ
 た(育)つへき事也。此道の一大事ハ、和漢の
 さかい(境)をまきらかす事、肝要々々、よう
 しん(用心)ありへき事也。
 又、当時、ひゑか(冷枯)るると申て、初心の
 人躰がひせん(備前)物、しからき(信楽)物
 などをもちて、人もゆるさぬたけ(鬮)くらむ事、
 言語道断也。か(枯)るると云事ハ、よき道具
 をも其あちわひ(味)をよくしりて、心の下地
 によりてたけくらミて、後までひへやせてこそ
 面白くあるへき也。又さハあれ共、一向かな
 (叶)ハぬ人躰ハ、道具にハかか(抱)らふへ
 からす候也。いか様のととり(手取)風情にても、
 なけく所、肝要にて候。
 たたかまんかしやうかわるき事にて候。又ハ、
 かまんなくてもならぬ道也。銘道ニいわく、
 心の師とハなれ、心を師とせされ、とも古人も

いはれし也。」³⁶

この中で珠光は、第一に茶の湯の修行には自己過信の慢心、執心が妨げであると戒め、初心者育てる事を教えている。次に和漢のさかいをなくし、漢(唐物)と和(国焼き)の取り合わせを述べている。第三には、初心者が巧者の真似をして備前、信楽焼きを用いることの愚かさを戒めている。

それまでの書院の喫茶では唐物が珍重されていたが、そこに備前や信楽の国焼きの道具を取り入れ融合させる試みが珠光によって始められた。珠光は「茶の湯は、ワラ葺きの小屋に名馬をつなぐようなのがよい。」と表現した。質素な茶室にただ一つだけ名物の道具が置かれていてこそ、それが際立つのである。また、『金春禅鳳雑談』³⁷には、「珠光の物語とて、月も雲間のなきはいやにて候。これ面白く候」と禅鳳(1454-?)³⁸が云っている。この言葉に珠光の美意識を見ることができる。

`心の師とハなれ、心を師とせされ`とは、`心の種とし心を種とせざれ`の仏説が引用されたものである。人の心とは周りの環境に影響を受けうつついやすいものである。心の師とはなっても、心を師とすることのないようにと説いている。

(2) 武野紹鷗—茶の湯中興の祖

紹鷗は堺の富裕な商家で育ち、24歳で上洛し、三条西実隆(1455-1537)³⁹に和歌を学び、大徳寺の古岳宗亘(1465-1548)⁴⁰に参禅した。茶の湯は、珠光の遺弟である宗珠⁴¹、椋宗理(1532-1570)⁴²、十四屋宗伍⁴³らを歴訪し、わび茶を追及した。⁴⁴ 紹鷗の茶は、実隆に学んだ定家の『詠歌大概』における和歌の理念を茶の湯に移す事を工夫し、「情(こころ)ハ新シキヲ以テ先ト為シ 詞ハ旧ヲ以テ用ユ可シ」「和歌ハ師匠無シ、唯旧歌ヲ以テ師ト為ス」⁴⁵の一文で悟ったと云う。またわび茶の心はどんなものかと問われた時に、『新古今和歌集』にある藤原定家の和歌を引き答えた。

見渡せば花も紅葉もなかりけり 浦のとま屋
の秋の夕ぐれ

「此歌の心にてこそあれと、被申しと也。花紅葉は、則、書院台子の結構にたとへたり。其花紅葉をつくづく眺め来たりて見れば、無一物の境界、浦のとま屋也。花紅葉を知らぬ人の、初めより、とま屋には住まれぬを、眺め眺めてこそ、とま屋のさびすまいなる所は見立てたれ。是、茶の本心なり、と言はれし也。」⁴⁶

紹鷗は、人工的な美＝書院台子＝花紅葉がわび茶に必要でないと主張しているのではない。最初からとま屋に住んでいては、その美しさは分からないだろうが、いろんな物を見て、試行錯誤の末、辿り着いたとま屋のさび住まいが素晴らしいと云っているのである。また、寂蓮法師の和歌にもその境地を例えている。⁴⁷

むらさめの露もまだひぬ槇の葉に 霧立ちの
ぼる秋の夕ぐれ

紹鷗は精神的な発展だけでなく、茶の湯を京都から堺の町へ導き入れ、町人の`茶の湯文化`を築き、また南宗寺の大林宗套(1480-1568)⁴⁸に参禅し、堺における禅文化の基礎を作った。

(3) 千利休—茶聖

俳諧の奥義について尋ねられた芭蕉は、
西行の和歌におけるよう
宗祇の連歌におけるよう
雪舟の絵画におけるよう
利休の茶湯における如く

貫通するものはみな一なりと答えた『笈の小文』の中に記している。⁴⁹ 俳聖芭蕉も認めた利休の功績は、茶の湯を宗教的、道徳的、芸術的に大成させたことである。

堺に生まれた利休は、北向道陳(1504-1562)⁵⁰について茶を学び、19歳の時紹鷗に師事したと伝えられる。その後、織田信長が堺を直轄領とするに及び、茶頭に起用され、信長亡き後は豊臣秀吉の茶頭となり、その名声を高めることになる。利休の名は、永

禄年間(1558-1570)に参禅した南宗寺の大林宗套から与えられた居士号とみられる。⁵¹

利休は茶の湯の道具、点前、作法に創意工夫をこらし、現在我々が目にする茶の湯の基礎を築いた。四畳半の茶室に代え、二畳、一畳半の茶室を試み、茶室の入口ににじり口を設えた。これは、漁師のとま屋からヒントを得て考案されたと伝えられているが、にじり口から入るには、刀を刀掛けに預け丸腰で入り、どれほど身分の高いものでも頭を下げないと入ることができない造りになっている。茶室の中に入れば、俗世の身分の違いなど関係なく平等であることを教えるべく狭き門を設えたのであろう。茶碗にも利休の好みが見れている。井戸、三島、刷毛目などの高麗茶碗や、楽茶碗、瀬戸、信楽の国焼き茶碗も用いられるようになった。中でも派手好みの秀吉が嫌った黒楽茶碗を利休は使い続けた。

利休も茶の心を和歌に例え、『南方禄』には下記のように記されている。⁵²

「又、宗易、今一首、見出したりとて、常に二首を書付け、誦せられし也。同集、家隆の歌に、
花をのみ 待つらん人に山里の 雪間の草
の春を見せばや

是、又、相かまえて得心すべし。世上の人々、そこの山、かしこの森の花が、いついつ咲くべきかと、明け暮れ、外に求めて、かの花紅葉も、我心にある事を知らず、只、目に見ゆる色斗りを楽しむ也。山里ハ浦のとま屋も同然のさび住居也。其年一とせの花の紅葉もことごとく、雪が埋み尽して何もなき山里に成て、さびすましたまでハ、浦の苦屋同意也。扱、またかの無一物の所より、自ら感の催すようなる所作の、天然と、はづれはづれにあるハ、うづみ尽したる雪に、春に成て、陽気を迎え、雪間の所々に、いかにも青やかなる草が、ぼつぼつと、一葉三葉、萌え出たるごとく力を加えず、真なる所のある、道理にとられし也。歌道の心ハ仔細もあるべけれども、この両者に紹鷗利休、茶の道にとり用いらるる心入を、覚えてしるし置なり。」

利休は師匠紹鷗が和歌に例えたわび茶の心をさ

らに発展させ、雪間の草の春に例えた。夏の花、秋の紅葉は今は雪に覆われ見渡す限り白一色の世界となっている。しかし、雪の下では新しい生命が春に向かって育まれている。目には白銀の世界しか写らないが、心の目は春の気配を感じている。実際に目に見える物、耳に聞こえる音が全てでは無い。そこに秘められた物を感じよという教えである。

また、利休の教えを理解するのに有名な話がある。ある時、利休に茶の湯の秘事はいかにと問うた人があり、それに利休はこう答えた。

「茶はふくのよき様に点て、炭は湯のわく様におき、花は其の花のよき様に生け、さて夏は涼しく、冬は暖かにする、此の外秘事なし。」問うた人は、そんな事は誰でも知っているという利休は、それに答えた。「たれも合点の事ならば、その如くして見給へ、吾れ貴殿の門弟になるべし。」

その座に居合わせた笑嶺和尚(1505-1583)⁵³は、利休の答えは至極せり、「諸悪莫作、衆善奉行」の類なり、三歳の童子もこれを知れども、八十の茶人も行う事あたわずと云えば、問うた人は感服したとある。⁵⁴「諸悪莫作、衆善奉行」とは、悪い事はするな、善い事はせよという意味であるが、この当たり前の事をする、これにまして難しい事は無いのである。

利休の目指したわびの心、美意識はその死をもって完結する。秀吉より切腹を命じられた理由には諸説あるが、秀吉の怒りを鎮め、死を免れる道もあったであろう。しかし利休は死を選択する。それは茶の道が利休にとって生死をかけるに値するものであったからであろう。切腹の日、彼は門弟を集め最期の茶会を開く。

そこで使った茶器を門弟に分け与えるが、自分の飲んだ茶碗だけは「不幸な人間の唇が触れたものだから」と云い、こなごなに砕いた。その辞世は利休の気迫を感じる力強いものである。⁵⁵

人生七十 力困希咄 吾這宝劔 祖仏共殺
提ぐるわが得具足の一つ太刀 今この時ぞ天に
なげうつ

Ⅲ茶禅一味

茶の湯は芸術としての面と人間形成という面の調和により構成されている。

利休は「小座敷の茶の湯は第一仏法を以、修行得道する事也」、「水を運び薪を取って湯をわかし、茶を立て仏に備へ、人にも施し我も呑なり。花を立て香をたきて、皆々仏祖の行ひの跡を学ぶなり」と説いている⁵⁶ように茶の湯の根源は仏法の修行得道であり、人間形成の道であると考えた。茶の湯で意味する仏法とは禅である。

禅とは釈迦と同じく座禅し、禅定三昧の境地にはいり、その三昧力により悟りを開き、さらに悟後の修行を継続して、釈迦と同じ境涯に到達しようとする行の宗教である。⁵⁷ 茶の湯では点前の作法を一つ一つの手順を追っていくことで無意識のうちに「わび」の境地に到達するのである。⁵⁸ 禅が自力修行で悟りを開くのと同様に茶の湯も自力修行で「わび」の境地に達するのである。

「茶味禅味同一味、唯在空々寂々中」は紹鷗の座右銘であり、⁵⁹両者が一味であることは茶の湯の真髄である「和敬清寂」が禅の世界観、人生観と相通ずるものであることから証明できる。「和」とは聖徳太子が発せられた憲法十七か条にもあるように、人と人との心の調和を意味している。「敬」は人を敬い、また互いの文化を尊重することを表す。「清」は穢れない、清らかな心を表し、その根底には「寂」すなわち静寂「悟り」の境地がある。

『紹鷗門弟への法度』⁶⁰はわび茶とは人間形成の道であると紹鷗が考えていたことが推察される。

- 一. 茶の湯は深切に交る事
- 一. 礼儀正敷和らかにいたすべき事
- 一. 他会の批判申間敷事
- 一. 高慢多くいたす間敷事
- 一. 人の所持する道具所望申間敷事
- 一. 道具を専に茶の湯いたし候は甚だ不宜事
- 一. 会席は珍客たりとも茶の湯相応に一汁三菜に過ぐべからざる事

- 一. 数寄者は捨てられたる道具を見立て茶器に用候事、況や家人をや
- 一. 茶の湯者の茶人めきたるはことの外にくむこと
- 一. 数寄者といふは隠遁の心第一に侘て、仏法の意味をも得知り、和歌の情を感じ候へかし
- 一. 淋敷は可然候、此道に叶へり、きれいにせんとすれば結構に弱く、侘敷せんとすればきたなくなり、ふたつともにさばすあたれり。可慎事
- 一. 客の心に合ぬ茶の湯すまじき也。誠の数寄にあらず。我が茶の湯と言所を心得専要、また客に手をとらず事あしく候

人と親切に交わる。礼儀正しく和やかにする。人の批判をしない。高慢にならない。人の持物を羨まない。物に執着しない。過剰に人をもてなさない。家族を大事にする。自分は特別であると思わない。隠遁の心を持ち、仏法の意味、和歌の感情を理解する。孤独は良いことであるが、きれいにし過ぎるのも、わびしくしようとし汚くなるのも過ぎたるは良くない。客がまごつくような自分本位の茶の湯をしてはいけない。これらは茶の湯に限ったことではなく、我々の日常生活においても心がけるべきことである。

岡倉天心は『茶の本』の中で、「茶道の理想ぜんたいが、人生のごく些少な出来事の中に偉大さを考えつくこの禅の一帰結なのである。」⁶¹と記している。また千宗旦(1578-1658)⁶²は、「茶の湯は日常に離れることなく、昼夜その心ざしを忘れてはならない」と説いた。禅も茶の湯もその教えは日常生活の中にあり、すべての行為が修行である。

結論

紹鷗は『紹鷗侘びの文』の中で、「侘と云ふ言葉は、故人も色々に歌にも詠じけれ共、ちかくは正直に慎み深くおごらぬさまを侘びと云ふ。」⁶³と説いた。利休が詠んだ和歌「茶の湯とはただ湯を沸し茶を点てて飲むばかりなる本(もと)を知るべし」の意味する本(もと)とは、この正直に慎み深くおごらぬ心、

落ち着いた精神状態を常に保つことを意味する。

今日趣味芸術の側面がクローズアップされることが多くなった茶の湯であるが、その本質は人間形成を目的としている。芸術としての伝統文化を継承することも重要であるが、茶の湯を嗜む者はその精神性を伝え広める役目を先人から託されていることを忘れてはいけない。利休の言葉「渴きを医するに止まる」の真意は、茶の湯は人の心の渴きを癒すことが肝要であると説いているのである。安らかな心で、相手を尊敬し調和することを常に心がける者こそが真の茶人である。

註

- ¹林屋辰三郎代表編『角川茶道大事典』（普及版）角川書店 2002、pp761-762
- ²千玄室著『一盃からピースフルネスを』淡交社 2003、p18
- ³読売新聞社著『茶人物語』淡交社 1968、p114
- ⁴林屋『角川茶道大事典』、p212
- ⁵同 pp900, 901
- ⁶岡倉天心著・桶谷秀昭訳『茶の本』講談社 1994、p17
- ⁷林利左衛門著『表千家流茶道』改訂増補版 河原書店 1967、p16
- ⁸布目潮風著『中国喫茶文化史』岩波現代文庫 2001、p54
- ⁹林屋『角川茶道大事典』、pp1431-1432
- ¹⁰永島福太郎『茶の古典』淡交社 1969、p14
- ¹¹林屋『角川茶道大事典』、pp872-873
- ¹²林屋辰三郎・横井清・榎林忠男編注『日本の茶書 1』平凡社 1994、pp11, 12
- ¹³同 pp12-13
- ¹⁴京都国立博物館編集発行『特別展覧会 日本人と茶 - その歴史・その美意識 -』2002、pp12-13
- ¹⁵林屋『角川茶道大事典』、p1399
- ¹⁶林屋・横井・榎林『日本の茶書 1』、pp25, 26
- ¹⁷林屋『角川茶道大事典』、p1066
- ¹⁸同 p1318
- ¹⁹木下桂風『喫茶史談』富山房 1970、p84
- ²⁰京都国立博物館編集発行『特別展覧会 日本人と茶 - その歴史・その美意識 -』p15
- ²¹林屋『角川茶道大事典』、p1051

- ²²同 p1332
- ²³林屋・横井・榎林『日本の茶書 1』、p24
- ²⁴林屋『角川茶道大事典』、p34
- ²⁵同 p34
- ²⁶徳川美術館・五島美術館編集発行『茶の湯 名碗一茶碗に花開く桃山時代の美』2002、p130
- ²⁷林屋『角川茶道大事典』、p636
- ²⁸同 p1077
- ²⁹読売新聞社『茶人物語』、p58
- ³⁰林屋『角川茶道大事典』、pp1379, 1380
- ³¹同 pp666, 667
- ³²同 pp824, 825
- ³³永島『茶の古典』、p67
- ³⁴林屋『角川茶道大事典』、pp99, 100
- ³⁵同、pp1201, 1202
- ³⁶林屋・横井・榎林『日本の茶書 1』、p35
- ³⁷永島『茶の古典』、pp71, 72
- ³⁸西野春雄・羽田昶『能・狂言事典一新訂増補』平凡社 1999、pp382, 383
- ³⁹林屋『角川茶道大事典』、p574
- ⁴⁰同 p484
- ⁴¹同 p1335
- ⁴²同 p1326
- ⁴³同 p630
- ⁴⁴林屋『角川茶道大事典』、pp824, 825
- ⁴⁵同 pp163, 824, 825
- ⁴⁶中村直勝著『茶道聖典 南方録』浪速社 1968、pp146, 147
- ⁴⁷林『表千家流茶道』、p14
- ⁴⁸林屋『角川茶道大事典』 pp806, 807
- ⁴⁹木下『喫茶史談』、p189
- ⁵⁰林屋『角川茶道大事典』、p360
- ⁵¹同 pp761, 762
- ⁵²中村『茶道聖典 南方録』、p157
- ⁵³林屋『角川茶道大事典』、pp671, 672
- ⁵⁴林『表千家流茶道』、p14
- ⁵⁵山折哲雄『近代日本人の美意識』岩波書店 2001、pp56-58
- ⁵⁶中村『茶道聖典 南方録』、pp3-12
- ⁵⁷芳賀幸四郎「茶禪一味」『叢書 禅と日本文化 3 禅と能楽・茶』ぺりかん社 1997、p39
- ⁵⁸千『一盃からピースフルネスを』、p187
- ⁵⁹林『表千家流茶道』、p3
- ⁶⁰堀内宗完著「茶と禅ー紹鷗の禅」『叢書 禅と日本文化 3 禅と能楽・茶』ぺりかん社 1997、pp180, 181
- ⁶¹岡倉『茶の本』、pp48, 49
- ⁶²林屋『角川茶道大事典』、pp753, 754

⁶³福嶋俊翁「和敬静寂について」『叢書 禅と日本文化 3 禅と能楽・茶』ペリカン社 1997、p101